

発表タイトル	台所と食に関するプロトタイプの中のモノに見る高度成長期日本の「生活」と「身の回り」－女性用家庭百科を例に－
発表者所属名	国際日本研究専攻
発表者氏名	大石 真澄

【研究の背景】

日本において人々が、自らの「生活」や「暮らし」に関して、そのプロトタイプを達成目標として実践を行うようになったのは比較的新しい出来事であるといえる。戦前から戦中にかけては、家政学や新生活改善諸運動のようなプロトタイプが存在した。戦後を迎えて、各種マスメディアの大衆化が本格的に進行したことで、生活のプロトタイプのあり方は、運動的側面とメディアイメージによる受容的側面の二つに分裂することになる。特に、戦後のマスメディアの変容においては、情報の提示がより視覚的なものへと移行して行く点が重要である。

【問題意識】

本研究での問題意識は以下の3つに大別できる。

- (1) 戦後、生活必需品が行き渡った後の都市における生活に即したモノの位相
- (2) 衣食住のうち、「食」「住」を横断する台所という場への視点
- (3) (1) (2)のメディアイメージにおける意味付与の様相

【研究の対象と目的】

以上の検討から本研究は、戦後の高度成長期中期（1964年頃）に、百科事典ブームの波に乗って非常に売り上げも多く、人気のあった女性向け家庭百科を分析の対象とする。これは、いわゆる戦前からあった家事指南書の系譜にあるものと考えられる。体裁としては事典形式になっており、新聞広告などを参照すると、新婚の妻を対象とした商品であったことが分かる。一般的に生活の「科学・合理化」を啓蒙的に提示するのが内容の大きな特徴である。

本研究はこれを対象として、都市部での生活改善において生活の「科学・合理化」のイメージ化に、メディア表象の上でモノがどのように関わったかを分析しようとするものである。実際には、紙面上での図版の働きを加味しつつ、対象資料の内容全体を分析することになる。

その上で、検討の際には次の2点に留意する。すなわち、そこで取り扱われるモノと、このモノのイメージの生成／拡散という点である。モノを中心に据えることで生活実践を交渉的な側面から読み解き、イメージの生成と拡散に注目することで、その交渉的な生活実践の主体的／環境受容的な2側面に留意するための手法である。これらの検討で、モノにプロトタイプから意味が付され、視覚的なイメージとして存在するようになり、独自の科学・合理性が生み出される経緯の一側面を観察することが可能になると考えられる。